

明石源氏の明暗

辻 憲男(文学部教授)

明石川の河口近くに「源氏物語の旧跡」なる一画がある。フィクションが現実を生んだ。物語では光源氏27歳の春、須磨の嵐の夜に夢告げがあり、翌朝、明石の入道から迎えの舟が来る。海辺の豪邸は趣きがあったが、高潮を恐れて、「このごろ、娘などは岡辺の宿に移して住ませ」ていた。娘は都びとに劣らぬ気品があった。そこへは馬でかよった(伝承地は神戸市西区^{はせたに}櫛谷町)。この結婚を転機に、源氏は京の政界に返り咲き、やがて姫君も迎えられて幸せになる。

藤江の浦ではスズキ(鱸)が釣れた。魚住の泊は今の江井ヶ島漁港。万葉歌の原文に「名寸隅」とあり、「寸」はキと読むので、古くはナキスミといたらしい。摂播五泊と称して、西から、櫻生(むろふ・兵庫県たつの市室津)、韓(から・姫路市福泊か)、魚住、大輪田(神戸港)、河尻(尼崎市神崎)の間が、各一日行程であった。風波で壊れるたびに港湾工事がおこなわれた。914年のこと、時の政治学者・三善清行(みよしのきよゆき)は、魚住の泊を早急に整備するよう、朝廷に具申した。魚住に寄らずに韓から大輪田まで一昼夜かけて航行すると、冬の強風の夜、星のない夜に船が難破する。一年に百艘、死者千人を超え、積み荷の損失もはなはだしい。ただちに能吏を派遣し、税収をもって修復されんことを(「意見十二箇条」)。清行は13年前にも同じ建議をしたのだが、いかんせん、都の貴族たちは、民の暮らしや産業振興にはほとんど目が向かなかつたようだ。



明石市藤江から淡路島。「荒たへの藤江の浦に
すずき釣る海人(あま)とか見らむ旅行く我を」柿本人麻呂。